

弱さを表現出来る場から始まる相互エンパワーメント ーポピュラー・ソーシャルワーク (PopSW) の実践的枠組み (2) ー

○ 兵庫県立大学 氏名 竹端寛 (会員番号 4253)

キーワード3つ: 批判的意識化・相互エンパワーメント・PopSW

1. 研究目的

福祉現場で働く職員に向けた研修といえば、新しい制度や技法などを学ぶ、知識教授型のものが多い。これは対象者への支援技術の向上に繋がる一方、支援者自身の「自己覚知」や自らの実存への問い直しを目指したものではない。昨年度の学会発表ではこの現象を「ソーシャルアクションの担い手から、サービス提供への雁字搦めへ」と批判的に論じた。

本年度は、「サービス提供に拘束される「意図せざる結果」を乗り越えるため、マイプラン作成を通じた対話的研修を取り上げ、それが支援者エンパワーメントにどのように繋がるかを検証する。発表者は10年前から、支援対象者ではなく支援者自身の「マイプラン」を作成する講座を継続している。安心して話せる場において、支援者が自らの弱さも表現し、己の生き方や有り様を振り返る対話的な場である (竹端 2017, 竹端 2023)。

北野 (2015) はエンパワーメントを「自分らしく・人間らしく共に生きる価値と力を高めること」と定義し、支援する・されるの非対称性を越えた「相互エンパワーメント」の可能性を説く。そこで本研究では、「支援者のマイプラン作成を通じた対話的な場が、批判的意識化や相互エンパワーメントを誘発する」という仮説を立て、検証することとする。

2. 研究の視点および方法

発表者は過去10年間「無理しない地域づくりの学校」「福祉のえんがわ」(岡山)「フツの人のまちづくりの学校」(長崎)「KANAU カレッジ」(養父)など福祉現場で働く人に向け連続研修を続けてきた。これらは、10人程度の受講者を対象に、4から5回かけておこなう連続講座で、月に一回、支援者が「マイプラン」を発表するものである。そして、講座の間に発表者とのオンライン面談も行い、講座でも毎回フィードバックを返している。

上記の講座に参加した受講生にインタビュー調査を行い、上記の講座が他の支援者向け研修と何がどのように異なっているのか、この講座を受けたことが、ご自身の批判的意識化や相互エンパワーメントにどう繋がるのか、等を明確にすることにした。

インタビューはオンライン (Zoom) で一人1時間程度行った。その内容をKJ法で分析し、内容の整理を行った。

3. 倫理的配慮

兵庫県立大学環境人間学部研究倫理委員会規定および日本社会福祉学会研究倫理規程に従った。学部研究倫理委員会では、インタビューを録画せず、個人情報も記載しない場合は審査不要と判断された。発表内容は全ての対象者に内容確認をしてもらっている。対象

者の属性が分かる内容は全て省いた。本報告は開示すべき COI 関係になる企業等はない。

4. 研究結果

研究結果として以下の3点が浮かび上がってきた。①知識教授型ではない学びあいが相互エンパワーメントを生み出す。②弱さの自己開示が生まれる対話から批判的意識化も生じる。③上記を通じ国家統制型ではないポピュラー・ソーシャルワークの視座が萌芽する。

5. 考察

①発表者達の行う連続講座では、自己紹介シートや期間内にやってみたことをプレゼンしてもらうシートを用意し、受講者が毎回発表し、その内容に講師や他の参加者からフィードバックがなされる。法制度や技法の理解ではなく、自分自身の有り様や「やりたいこと」を掘り下げる講座である。また過年度受講生が OBOG として多数参加し、受講生と対話しながら先達としてサポートする、支援者同士の学びあいのコミュニティでもある。

福祉現場の支援者達は、自分の思いや感情の言語化には慣れていない。毎回の講座で沢山の質問やコメントが投げかけられ、受講者達は自己理解を深め、新たな言葉を獲得していく。このプロセスを通じて、支援者自身が「自分らしく・人間らしく共に生きる価値と力を高めること」が出来るだけでなく、このコミュニティ全体が支援者同士の相互エンパワーメントの場としても機能している。

②連続研修の途中で、講師と受講者が1対1で面談を行う。支援者自身のこれまで生き様や、現場で働くモヤモヤを語ってもらえるよう、講師側はじっくり聴く。自己アセスメントの経験がほぼ無かった受講者には、自らの仕事を反省的に振り返り、弱さを自己開示するきっかけになった。その中で、従来の働き方や対象者との向き合い方にも、新たな気づきや発見が生まれ、自らの立ち位置や職務に対しても批判的意識化が出来るようになる。

③支援者は、支援過程を通じて対象者をエンパワーメントすることが求められる。だが、支援現場は忙しく、疲弊感を感じる支援者も多く、事業加算や自らの資格認定更新等に全く繋がらない研修を受けるハードルは高い。一方、この研修を受けた受講生達は、安心して弱さを開示できる場において、専門職の鎧を脱ぎ、自らの声を取り戻していった。これは国家統制型のソーシャルワーク実践が「サービス提供への雁字搦めへ」に突き進む中で、そうではない別の可能性を生み出すポピュラー・ソーシャルワークの萌芽でもある。

<文献>

北野誠一（2015）『ケアからエンパワーメントへ：人を支援することは意思決定を支援すること』ミネルヴァ書房

竹端寛・尾野寛明・西村洋己編（2017）『「無理しない」地域づくりの学校：「私」からはじまるコミュニティワーク』ミネルヴァ書房

竹端寛(2023)「Story of Selfを話す・聞く場の力：『無理しない』地域づくりの学校という実践」室田信一・石神圭子・竹端寛編『コミュニティ・オーガナイズシングの理論と実践：領域横断的に読み解く』有斐閣